後文学論争

上巻

井吉見 監修

番町書房

戦後文学論争 上巻

初版発行 昭和四七年一〇月三一日 五版発行 昭和五二年一一月三〇日

監修 臼井吉見
編集 大久保典夫 紅野敏郎 高橋春雄 保昌正夫 三好行雄 吉田凞生

発行者 村川修二郎 発行所 番町書房 東京都中央区京橋三の五（主婦と生活社内）電話五六七-〇三一一（代）振替東京平一五四四

印刷 図書印刷株式会社
製本 株式会社若林製本工場

©1972 Printed in Japan. 1090—711060—6959 乱丁・落丁本はおとりかえいたします

戦後文学論争　上巻

目次

主体性論争

第二の青春……荒　正人　一三
私は誰？……坂口安吾　二六
民衆とはたれか……荒　正人　三四
文学者の責務（座談会）……埴谷雄高他　五五
新文学創造の主体……小田切秀雄　七二
人間的自由の限界……梅本克己　八二
歴史における主体の問題……林　健太郎　九一
〔解題〕……紅野敏郎　一〇六

文学者の戦争責任論争

文学における戦争責任の追求……小田切秀雄　一二五
ひとつの反措定……平野　謙　一二七
批評の人間性（一）……中野重治　一三〇
前世代の詩人たち……吉本隆明　一三九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ヤンガー・ゼネレーションへ……花田清輝 三九
民主主義文学と戦争責任……秋山清 一四七
戦争体験と戦争責任……日高六郎 一六〇
〔解題〕……大久保典夫 一六三

戦後「政治と文学」論争

政治と文学(一)……平野謙 一七一
批評の人間性(一)……なかの・しげはる 一七五
小林多喜二……岩上順一 一八二
「政治の優位性」とは何か……平野謙 一九〇
民衆はどこにいる……荒正人 一九九
批評の人間性(二)……中野重治 二〇六
一匹と九十九匹と……福田恆存 二二三
文学者の責任……小田切秀雄 二三六
政治的風土……荒正人 二三八
IN EGOISTOS……加藤周一 二四三

〔解題〕……三好行雄 二四八

短詩型芸術をめぐる論争

展望……臼井吉見 二五五
第二芸術……桑原武夫 二五九
短歌の運命について（座談会）……木俣　修他 二六八
短詩型文学再出発の拠点……赤城さかえ 二七七
問題は地下水のようにつづいている……久保田正文 二九七
〔解題〕……紅野敏郎 三〇一

星菫派論争

新しき星菫派に就いて……K 三〇九
オネーギンを乗せた方舟……荒　正人 三一四
中村・加藤・福永の仕事……本多秋五 三三一
文学的自伝のための断片……加藤周一 三三五
世界的知性にもの申す……本多秋五 三三三

〔解題〕……三好行雄 三四六

近代主義批判論争

近代主義をめぐつて（座談会）……宮本顕治他 三五一
近代主義の主体性論……甘粕石介 三六四
近代主義と近代精神……伊豆公人 三九〇
近代主義文学の特徴と方法……除村吉太郎 四〇五
〔解題〕……高橋春雄 四一七

知識人論争

知識階級の運命……中島健蔵 四二七
大知識人（インテリ）論……日高六郎 四三六
論理の暴力について……福田恆存 四四五
主体的知識人……荒正人 四五五
〔解題〕……吉田凞生 四七七

風俗小説論争

私は小説家である……丹羽文雄 四八五
小説鼎談（座談会）……林芙美子他 四九四
二葉亭と女郎屋……中村光夫 五〇五
小説家と批評家の摩擦……丹羽文雄 五一三
丹羽氏に答う……中村光夫 五一五
批評家と作家の溝（座談会）……福田恆存他 五一七
作家の立場と批評の基準……伊藤整 五一九
現代風俗小説批判（抄）……中村光夫 五二三
〔解題〕……保昌正夫 五四三

チャタレイ論争

主任弁護人最終弁論……正木昊 五五一
特別弁護人弁論（要旨）……福田恆存 五五九
「チャタレイ夫人の恋人」の性描写の思想……伊藤整 五六三

〔解題〕……吉田熙生　五九七
本巻収録論争関係資料……六〇五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

戦後文学論争

上巻

編集委員
大久保典夫
紅野敏郎
高橋春雄
保昌正夫
三好行雄
吉田凞生

凡　例

一、本書に収録の論文は、原則として初出に従い、旧字・旧かなづかいも原文通りとした。初出における明らかな誤植と思われるものは、これを訂正した。

一、新聞掲載時の小見出しは、これを削除した。

一、各論文末の出典記載は、月刊誌については月号、非月刊誌は号数をもって示してある。

一、解題における引用文中の漢字・かなづかいは、印刷の都合上、漢字を当用漢字に改め、かなづかいは原文通りとした。

主体性論争

第二の青春

荒　正人

文學書をよみはじめたころ、ドストイエフスキーのあの稀有の體驗、すなはち、ペトラシエフスキー事件の連累者として、一旦死刑の宣告をうけ、その執行の直前に、あらかじめの筋書にしたがつた特赦が降り、死一等を減ぜられて、シベリヤ追放になるという挿話をしり、ほとんど絶望にも似た羨望感を禁じえなかつたことがあつた。かれの天才よりも、その千萬人にひとりもめぐりあふことのない異常な人生經驗にたいするうらやましさであつた。それは、人生の深淵へのむしろロマンテイツクなあこがれから發したものだつたのかもしれない。

しかし、わたくしたちがこんどの敗戰で知つた所のものは、かの偉大なる十九世紀ロシヤ作家のそれに比して、いささかたりとも劣るものではなかつた。本土決戰、一億玉碎といふ自暴自棄の作戰（！）に驅り立てられてきた善男善女は、無條件降服の詔勅が發せられる直前まで、集團自殺を覺悟してゐた。空襲に際しては、あのごみ棄て穴にもおとる防空壕の片隅に掛け替へのないいのちを託してきたのだ。そして、一片の赤い紙に恩愛の絆をことごとく絶つことを無上の名譽として要求されてきたのだつた。

支那本土への侵略戰爭が火蓋をきつたのは、わたくしが最後の學校教育を了へる年の眞夏のことであつたが、そのとき以來十年にちかい歳月を一日たりとも、死への招待狀にたいする恐怖なしには夕刻家の敷居をまたぐことができなかつた。ああ、今日もこなかつた。が、明日は、一月あとは、一年さきは……。いつか、あのペスト菌のやうに忌はしい紙切れが、自分を無意味な殺戮へ『赤き死の笑ひ』のなかにひきずりこんでゆくであらう。天皇陛下萬歳！　と、奴隷のことばを叫んで生を了へることのできないものにとつて、過去數千日の戰爭又戰爭の期間が、生きながらの地獄であつた、と述懐しても、それはなんの誇張でもない。そのころ、わたくしが電車や汽車で一切軍服と席を隣りあはせることが生理的にできなかつたと告白しても、それがたんなる恐迫觀念の仕業のみではないと信じてもらへるであらう。やはりそのころのこと、わたくしは汽車の旅先で、一學生が女文字の手紙を披いてゐるのを盗見したが、そこには――ももとせのいのちねがはじいつのひかみたてとゆかんきみとちぎりて、としたためられてゐた。その戀人同志にたいする哀憐の情は畢竟おのれをいとほしむ心にほかならなかつた。

ところで、ドストイエフスキーが死神と膝つきあはせたのは、一八四八年十二月二十二日、セミヨーノフスキー廣場で、思ひも

かけず死刑の判決文がよみあげられ、同囚のものが柱に三人づつ縛りつけられ、それから數分たつて執行中止の鐘が鳴るまでのことであつた。永劫の淵のうへに吊り下げられたのは一瞬間であつた。しかるに、わたくしたちが死の冷たい壁に面したのは文字通り十年の歳月であつた！　ノートを繰つてみよう。日附はないが、八・一五にちかいころであることは間違ひない。

「……『伸子』の冒頭、そして『風と共に去りぬ』の結語、ぼくはふとそのことを考へてゐた。それはあまりにも現實からはなれた、遠い遙かなおもひであり『空想』とよんでもなほそらぞらしい感じのするものであつたけれど……。

だが、もはや洋菓子の味覺を忘れてしまつたやうに、この空想はぼくにとつてそれほど魅力あるものではなくなつてゐた。

一世紀ののち、一人の歴史家が現はれて、若しこのやうな現代の絶望についてかたりうるとしたら、ぼくはそのひとのヒューマニティにみちた想像力にいさぎよく帽を脱ぐであらう。」

この斷想のすぐつぎの頁には、マルスの唄聲の消えた日の喜悅の情について、現實の地上樂園についてしるされてゐるのだ。八・一五の數日まへに降服の早耳的ニュースを聞いたわたくしは、その翌日買出袋を背負つて利根川の一分流に沿つてひとりで歩きつつ、ある憤激をこめた奇怪な哄笑を二三度虚空にむかつて繰り返したものであつた。そして、始めあるものは終りあり、奢れる者久しからず……と、ロずさんでゐた。

いま顧みて、すぐる半歳はうたがひもなく異常の年（アヌス・ミラビリス）であつた。地獄を見、天國を知り、最後の審判を見聞し、神々の顛落を目擊し、天地創造を實見したのであつた。ドストイエフスキー以上に稀有な、ほとんど信じうべからざる體驗をかさねた。

正常の年（アヌス・ノルマリス）ならば、第二の青春などとは、狂者のことばであり、第二の初戀といふにひとしく本來矛盾した修辭であり、もともとありえないことなのである。しかも、わたくしたち、限定すれば、昭和初年の左翼運動時代に青春を迎へ、つづいて『黑い行列』を先導とする反動の時代をくぐり、こんにち三十歳代といはれてゐるインテリゲンチャが、きのふけふを息づいてゐる雰圍氣は、壯年や中年のそれではなく、まさに在りし日のものである。もちろん、初戀に喪つた純潔がふたたび還らぬやうに、この青春もそつくりそのままのうひうひしい感覺をもつて蘇つてくることはないけれども。

その微妙なる差は、こんにちほんたうの青春のなかにあるわかいひとたちの生（き）の感覺に對照すればわかるであらうか。たとへば、おそらくまだ十六、七の一少年と思はれるある中學生は「……今まで頭から惡い者と教へ込まれてゐた共産黨員は、主義のためには投獄されて悲慘な目に遭ひながら飽くまで主義を捨てませんでした。その主義の可否はさておきあらゆる迫害にも屈しなかつた固い信念と節度には、卒直に深い敬服の念を禁じ得ません。」といふことばを一新聞に投書してゐるが、教育勅語と軍事教練とアルバイト・デイーンストのなかから、なほかつこのやうな素朴、單純、大膽な感受力をはぐくみえたことをたかく評價し、わけしり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com